

アジ研図書館は現在私にとって最良の友である

小島 淑男

研究者を目指しアジア関係の専門図書館に通い始めてすでに五〇有余年が過ぎている。院生時代以来最もよく通ったのは東洋文庫をはじめとする東京都内の図書館であるが、同じ東京都内にあり勤務先にも近い市ヶ谷にあったアジ研図書室には数えるほどしか出かけていない。私にはなぜか近づきにくいという印象が残っている。しかし、海浜幕張にある現在のアジ研図書館は、明るく開放的（大半の図書が開架式の書棚に陳列）で、閲覧サーヴィス担当の人たちも非常に親切である。私はおよそ四〇年ほど前に住居を都内から千葉県市原市に移した。海浜幕張は勤務先の最寄り駅水道橋と自宅の最寄り駅内房線浜野との中間で、アジ研図書館は私にとって最も都合のよい場所に立地している。七年まえに常勤身分から解放された時、教授会での惜別の挨拶のなかに「これからはアジア経済研究所図書館を最良の友とします」という言葉

を挿入した。以来アジ研図書館は現在も非常勤で通っている大学での教育と研究に欠かせない資料を提供してくれる大切な存在である。

大学における私の担当科目は中国経済である。教学との関係でいえば、現代中国経済に関する中文書籍（『中国経済年鑑』、『中国統計年鑑』等各種年鑑を含む）、経済雑誌（『財經』、『中国企業家』、『金融論壇』、『中国農村観察』、『香港の『経済導報』等、複印報刊の『民營経済与中小企業管理』、『金融与保険』、『経済史』等）、

新聞（『経済日報』、『金融時報』、『上海證券報』、『農民日報』、『中国経営報』等）を広く閲覧し資料を蒐集させていた。ただし、これらの文献は同時に私の長期にわたる研究テーマである「現代中国における民營経済の発展と民營銀行創設への展望」にも貴重な資料を提供してくれている。なお、同図書館では最近話題になっていく『南方周末』も閲覧できる。

私は学部、大学院ともに東洋史学科に在籍し、近代中国の社会経済史を主たる研究対象としてきた。その成果の一部は『近代中国の農村経済と地主制』、『汲古書院』という本にまとめている。また、中国人留日学生に関する研究も一九八〇年前後から開始し、その成果の一端は一九八九年に『留日学生の辛亥革命』（青木書店）という本にまとめてみた。いずれも未完成である。そこで私は最近アジ研図書館に豊富に所蔵されている当代（現代）地方志（例えば『広東省志』、『浙江省志』、『山西省志』等）の人物志を閲読し、日本に留学した中国人をすべて拾い上げるとい

う気の遠くなるような作業をすすめている。その目的は当面清朝末期から中華人民共和国成立までの時期に日本に留学し、政治、経済、文化、教育、自然科学等様々な分野で残した彼らの業績をトータルに明らかにすることである。同図書館には、多種類の人物辞典、人物伝、文史資料なども所蔵されているので、それらと照合することにより、多くの留学生たちの経歴と業績

が正確に描けると考えている。正史に登場することのないしかし大切な役割を担った人々にも光をあてたいというのが私の願いである。

最近、日本ではプライバシーの保護の名の下に大学の卒業生名簿というものが、非常に閲覧しにくくなっている。卒直にいつて戦前の卒業生名簿、特に外国人の日本留学生名簿は公開してもよいのではないかと考えている。少なくとも研究者にはぜひ閲覧させていただきたい。その最大の理由は、留日学生の人物伝中に留学先の学校名が誤って書かれている例が少なからず存在するからである。特に私の勤務する日本大学という名称は中国人から見ると「日本の大学」と受け取られやすい。一〇年近く前、そのような誤解があることに気がつき、日本大学の卒業生契印簿をもとにして明治期の中国人留日学生を調べたところ、中国同盟会員や国会議員はいうまでもなく民国期の第一級行政区の裁判長や検事長のなかにまでその出身校に誤記が存在しているのに驚かされた。そのようなこともあり、私は『日本大学史紀要』第一一〇号、第一一三〇号に「日本大学中国人留学生の帰国後の活動」（一）～（三）という小論を三号にわたって連載した。また、日本大学の大学史論輯『鬻誌』第七号には台湾新民報社編『台湾人士鑑』、台湾問題研究所編『台湾総覧』等を活用して「日本大学台湾人留学生の卒業後の動向」（一）という小論も掲載した。いずれもアジ研図書館所蔵の台湾関係図書、人物辞典、研究雑誌等を参照させていただいている。

研究・図書館通いともに体力勝負である。
（こじま よしお／日本大学名誉教授）